

幼な児の死

このの発端は私が昨年(二〇〇〇年)六月十八日、ダラエ・ヌール診療所での建て直しに訪れたことにあった。アフガニスタンに入ったのは、タリバン政権出現後、初めてのことであった。久しぶりにカイバル峠を越え、ジャララバードからクナル河沿いの奥地に置かれたダラエ・ヌール、ダラエ・ピーチ、ヌーリスタン・ワマの各PMS診療所をめぐる。

その折、ダラエヌール診療所で群を成して待機する患者たちを見て、何事かと驚いた。患者の大半が赤痢などの腸管感染症である。犠牲者の大半が子供で、上流から何時間もかけて歩いてくる者も少なくなかった。外来で待つ間、死んで冷えてゆく乳児を抱えた若い母親が途方にくれていた。その姿がまぶたの奥深く焼きついて涙がこぼれた。

その異常な患者数の多さに、ペシャワール側では「ただの薬ほしさに集まってくる」という憶測も流れていたが、実は赤痢の大流行が理由で、更にその原因が飲料水の欠乏にあることを確認したのである。

例年なら、水であふれる谷は、田植えの季節である。だが、水田どころか、行けども行けども干からびた地面と、涸れた水無川が漠々と続いていた。例年なら、この季節はジープが立ち往生するほど河川の水かさが増すのである。窮状は一見して分かった。事態に気づかなかつたのは、診療所の運営を旧JAMS(日本・アフガン医療サービス)のアフガン人スタッフに任せきりで、目が行き届かなかった当方のずさんさにも問題があった。実は、この直前、「山岳無医地区診療」という本来の目的を軽視する旧JAMSを、すったもんだの挙句に解体統合し、十年來責任者の位置にあったシャワリ医師を解雇、おざなりにされてきた僻地診療所



建て直しが計画されたばかりだったのである。

荒れた診療所を見て、改めて私の責任を感じない訳にはゆかなかった。しかも診療所の井戸が涸れる寸前だという報告も受けていなかった。その井戸さえ、周辺の住民が水をもらいにやってくる実態を、この時初めて知ったのである。村々の大半の井戸が涸れており、水がなければ食器などが汚染されるのは当然で、赤痢などの流行はこのためであった。

六月の実施検分に参加し、七月にダラエ・

ヌール診療所に赴任したPMS古参のサイド

医師は、窮状を訴えて「少なくとも診療所周辺の清潔な飲料水元確保」を提案した。地域ぐるみの病気予防を重視するわがPMS(ペシャワール会医療サービス)は、七月一日この提案を全面的に支持、ともかく試掘を開始するように伝えた。その後、さらに日本側事務局の同意を取りつけて、七月十日、「三〇の水源を確保して離村を阻止せよ」と指示を下した。

この時点ではまだ、アフガニスタンの早魃はダラエ・ヌールの局地的な災害と思われ、誰もその後の展開を予測していなかった。ここに波乱続きの現地活動は、まるで駄目押しのように、最後までいえる巨大な課題に挑むことになりつつあったのである。さらに思いがけぬ第二出来事がパキスタン側で生じ、事態の深刻さを我々に印象づけることになる。



ダラエ・ヌール診療所の前で診察を待つ村人

